

いわき光洋対本宮



上/「ノック開始」のアナウンスとともに飛び跳ねて守備位置に向かういわき光洋の選手達。



右/いわき光洋先発の遠藤投手。140キロ近い速球を効果的に使い3・4回は全て三振でアウトに取るなど6回無失点と試合を作った。

途中出場の青砥選手の活躍も光った。8回は好機にタイムリー。9回の無死一塁の場面での二塁守備でセンターに抜けそうな当たりをダイビングキャッチし二塁にトスし1アウトを取った。彼のような控え選手の活躍にも注目だ。本宮は先発の武田選手が打球の直撃を受けながら完投し意地を見せた。

この試合は、いわき光洋の3人の投手が全員登板した。7回は左腕の酒井選手。「緊張して力んでいた」(郷家監督)ようにこの回0点に抑えるが、ワンバウンドの球が多く四球を出しピンチを作るやや不安定な内容。続く8・9回は抑えの渡辺啓選手がマウンドに上がる。こちらは140キロ超の伸びのあるストレートで押し2回4三振ときっちり抑えた。今後も3投手の継投、彼らの出来が鍵になってくるだろう。

いわき光洋高校の初戦は昭和27年野球部創立の伝統校本宮高校との対戦。3回表、いわき光洋は得意の足攻で先制する。この回先頭の1番・酒井選手が中前安打で出塁。ディレイトスチールで二塁に進み、続く渡辺貴選手の左前安打で先制のホームを踏み、レフトが逸らす間に打者走者も三塁へ。4番遠藤選手のレフトへの犠牲フライでさらに1点。試合を優位に進める。先発の遠藤選手は立ち上がりから変化球を低めに集め打たして取る投球。しかし、その後は一転140キロ近いストレートを効果的に使い3・4回はアウト全てを三振で奪う快投。捕手・木下選手の「投手の特徴を活かす配球をする」という言葉通り、遠藤選手の力のあるストレートを効果的に使い本宮高校打線を抑えた。



右/先制点を取り、ベンチ内で盛り上がるいわき光洋の選手達。

